

中国語教育におけるオンデマンドシステムと言語テスト

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程中国語・中国文学専攻 土谷彰男

aktsuchiya@suou.waseda.jp

早稲田大学文学部 楊達

yoht@waseda.jp

1. はじめに

早稲田大学文学部では、インターネット オンデマンド方式による遠隔協調型授業を推進する戸山リサーチセンター（TRC）が、2001年度（平成13年度）に文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」に選定された。インターネットをはじめとしたネットワークを利用することにより、新しい教育研究スタイルの確立へ向けた研究を推進することをその目的とする。これに先立ち、中国語教育の領域では、2000年度に中国語・中国文学専修の教員を中心として、プロジェクト研究所である「中国語教育総合研究所」（代表・楊達）を設立し、2002年度より「初級中国語」および「中級選択中国語A」の授業において、インターネット オンデマンド方式を授業に導入した。これにより、コミュニケーションを重視した語学教育の初期段階において、インターネット オンデマンドの特性を活用することにより、教育効果がこれまでより高まるとの認識に至った。本稿では、インターネット オンデマンド授業の導入事例として、特に2003年度（第2年次）の取り組みについて、オンデマンドシステムの概要、およびコンテンツの作成と運営を中心に報告する⁽¹⁾。

2. 授業形態

TRCによるオンデマンド授業には、授業形態から、通常授業を行わずオンデマンド方式による遠隔型授業のみを行う「フルオンデマンド型」と、通常授業のなかでオンデマンド方式を導入する「ハイブリット型」の2つ形式がある。いずれも、インターネットの特性である高い汎用性と優れた再現性を授業運

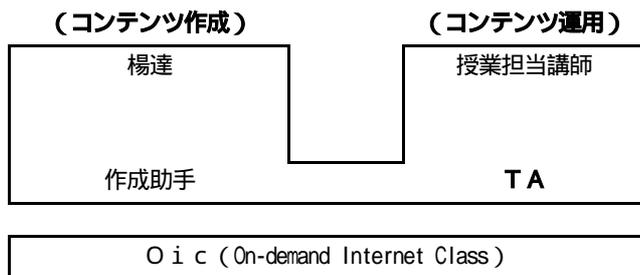
営に導入しようとするものである。また、コンテンツ構成から、「同期型コンテンツ」、「非同期型コンテンツ」、「ビデオ型コンテンツ」の3つのフレームワークがある。いずれも、講師の講義を内容とする動画映像を中心した構成である。⁽²⁾

中国語教育にオンデマンド方式を導入するにあたっては、会話を中心としたコミュニケーション能力の向上に主眼を置く立場から、教場において講師と対面して授業を進める「対人的」要素を排除するのは難しい。このことから、このような対人的要素を損なわない範囲で、インターネットの特性を導入するよう図られた。すなわち、主に教場外での学習においてインターネット オンデマンド方式を活用することにより、教場においての少人数教育を実現しようとするものである⁽³⁾。2003年度では、「初級中国語」27クラス（1年生外国語科目、週40.5時間、共通教材を使用）、「中級選択中国語A」1クラス（2年生以上選択科目、週1.5時間）の合計28クラス（週42時間）に、ウェブコンテンツによるインターネット オンデマンド方式を導入した。オンデマンド方式と教場授業とは、「非対人 対人」として互いに排除するものではなく、相互に補完的な連携が保たれることを目指している。

3. コンテンツの作成と運用

インターネットの特性である汎用性と再現性を効果的に実現させるため、まずはオンデマンドの「基本フレーム」と「コンテンツ」を切り分けることによって運営の利便性をはかり、さらにコンテンツの作成と運用にそれぞれ人員を適宜配置して独立性を高め、相互に関連させるようにした（図1）。

(図1)



具体的には、基本フレームについては、NEC(株)および(株)モーションイメージの協力のもと、CGIプログラムによるウェブコンテンツを基本フレーム(On-demand Internet Class = Oic、<http://oic.wls.jp/>)としてこれを活用した。これにより、コンテンツ作成側、および運用側にインターネットに関する専門的知識がなくとも、授業運営においてオンデマンド方式を円滑に利用できるようになった。コンテンツの作成については、1~2名の作成助手を配置して、テキストデータ、および音声・画像データの作成・編集を行った。またコンテンツの運用については、ティーチングアシスタント(TA)1名を配置して主に教場利用における運用管理を行うとともに、作成側とのパイプ役として緊密な連絡を保つようにした。

コンテンツの運用は一義的には授業担当講師に任されているが、その運用方法は統一した手順に沿って行われる。授業講師はまた、テスト機能を使用することによって、学生の到達度を確認することができる。

4. 中級選択中国語における導入例

2003年度においては「初級中国語」および「中級選択中国語A」の授業にインターネットオンデマンド方式(以下、オンデマンドシステムと呼ぶ)を導入した。

中級選択中国語A(担当講師:楊達)は、第一文学部第2学年以上の学生が履修する通年選択科目(週1コマ1.5時間、全30回、4単位、2003年度履修登録者数59名)であり、中国語を専攻する学生(中国語・中国文学専修)においては必修科目となっている。1年次に学習した基本事項を踏まえながら、会話能力の向上に重点を置き、ネイティブの発話スピードに合った理解と表現を目指す。そのため、コンテンツ構

成はおもに中国語ネイティブに取材したインタビュー音声によるリスニングが中心となる。

コンテンツの概略は以下の通りである。

- (1)「単語テスト」10問
 - ・中国語音声を聞きながら単語の正しい意味を選択肢から選ぶ。
- (2)「インタビュー音声」1~3分程度
 - ・(6)「インタビュー」映像の音声のみをはじめに聞かせる。
- (3)「内容選択問題」5~8問
 - ・中国語音声を聞きながら、正しい内容を表す日本語を選択肢から選ぶ。
- (4)「翻訳選択問題」10問前後
 - ・中国語音声を聞きながら、正しい日本語訳を選択肢から選ぶ。
- (5)「ライティング」
 - ・インタビュー音声を聞きながら中国語によって全文を書き取る。
- (6)「インタビュー映像」1~3分程度
- (7)「次回の単語」一課につき15問前後
 - ・次回内容の単語を予習のうえ、授業開始時に「単語テスト」を行う。

初級中国語、中級選択中国語Aとも、いずれも音声を聞きながら、(1)より順に設問に答えていくといった手順に統一した。特に、中級選択中国語Aでは「インタビュー映像」を教材の中心としているが、学生にはまず音声のみを聞いて理解させ、「内容選択問題」、「翻訳選択問題」、「ライティング」の順に設問に答えながらインタビュー内容を確認させたのち、最後に映像を見せるという手法をとる。これは、学生がそれぞれの設問に答えていくなかで、同一内容の中国語音声を何度も繰り返し聞くことによって、ネイティブの発音する音声に対して聴覚イメージを早い段階で形成させるといったねらいがある⁽⁴⁾。

なお、いずれの設問も選択肢から日本語を選ばせる形になっているが、これはオンデマンドシステムの基本フレームが日本語文字コードのみに対応しており、中国語文字コード(簡体字GBコード)には対応していないことによる。したがって、コンテンツのなかでも、(5)「ライティング」は筆写ののちOHP(OHC)によって示した正解をもとに自己採点し、また、(7)「次回の単語」は、ワードファイルをダウ

ンロードするといった形式を採った。今後の改善すべき点である。

また、設問への解答方法は、オンデマンドシステムの基本フレームの仕様から、大問ごとにポップアップウィンドウによってストリーミング再生された音声を一通り聞きながら、チェックボックスに設問ごとにチェックを入れて解答し、最後にそれら解答データを送信するといった形式である。このうち正解が教場において講師より示され、必要によって解説が加えられる。設問ごとに「解答 正解判定」というように進めていく、所謂「ステップ・バイ・ステップ」式にはなっていない。内容の程度と学生の習熟度を見極めながら、効果的な解答方式を検討する必要がある。

中級選択中国語Aにおいては、授業の前半はオンデマンドシステムによる授業を展開し、後半は講義を中心とした授業を行った⁵⁾。コンテンツは公開期間の設定が可能であることから、受講生は授業前後にコンテンツを参照する環境が与えられている。これによって、授業とほぼ同じ内容を予習・復習することが可能となった。

5. コンテンツ作成におけるオンデマンド特性の活用

オンデマンドシステムにより学生の成績を系統的に管理することが可能になったことから、定期試験をオンデマンドシステムによって実施した。

後期試験における設問の内容とその概要は以下の通りである。

(1) 「単語」10問(100点)

・中国語音声を聞きながら単語の正しい意味を選択肢から選ぶ(既習内容)

(2) 「正解選び」10問(100点)

・設問ごとにそれぞれ短文を聞き、中国語の問と答を聞きながら、正しいものを選ぶ(未習内容、中国語検定試験3級程度の問題)

(3) 「翻訳選択問題」5問(50点)

・中国語音声を聞きながら、正しい日本語訳を選択肢から選ぶ(既習内容)

(4) 「内容選択音声問題1」5問(50点)

・インタビュー音声を聞き、それについての中国語の問と答を聞きながら、正しいものを選ぶ(既習内容)

(5) 「内容選択音声問題2」5問(50点)

・インタビュー音声を聞き、それについての中国語の問と答を聞きながら、正しいものを選ぶ(既習内容)

(6) 「ライティング」(50点)

・インタビュー音声を聞きながら中国語によって全文を書き取る(既習内容)

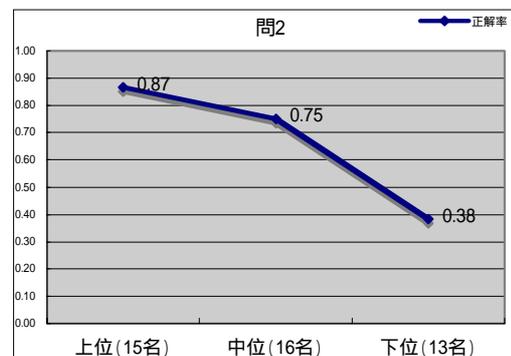
前期試験もほぼこれと同様であるが、設問数に大幅な増減がある。授業では通年で23課分の内容を扱ったが、後期試験の出題範囲はそのうち後期11課分を中心とした。受験者数48名、試験時間90分、平均点287.0点、最高点370点、最低点210点である。

試験結果を概観するなかで、正答率、あるいは誤答率の統計的傾向を観察することにより、コンテンツ作成においてオンデマンド特性を活用する方途を探ることが可能であると思われる。以下、この点について、特に有意の結果が得られた(2)「正解選び」(100点、有効解答数45、平均54.8点)を例にして指摘したい。

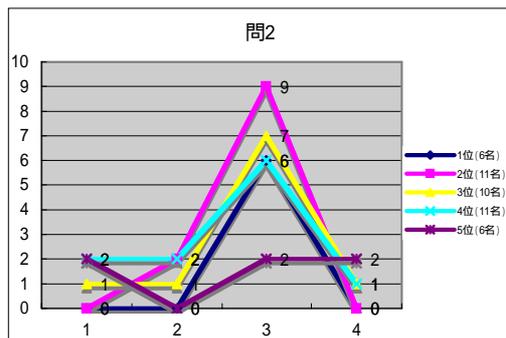
総合得点に従って全体を5階層に区分し、成績の高いほうよりそれぞれ「第1位」、「第2位」...とし、各設問における得点の状況を観察する。各設問では大問ごとの合計得点に従って3階層に区分し、成績の高いほうより「上位」、「中位」、「下位」とする。正解および誤答のそれぞれの傾向を、総合得点の階層と大問合計の階層とを互いに照らし合わせながら比較した。

設問に対する正答率について、各階層の数値をグラフ化し(図2) また各選択肢の解答分布を、総合得点のそれぞれの階層にしたがってグラフ化する(図3)

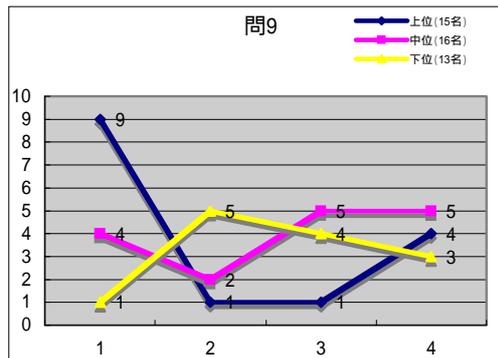
(図2) 3階層正答率の例(問2)



(図 3) 5階層解答分布の例 (問2、正解 3)



(図 4) 3階層解答分布の例 (問9、正解 1)

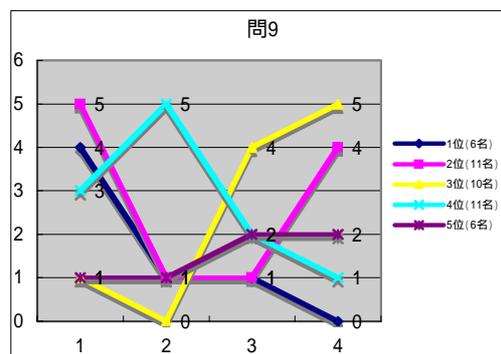


設問における正答率のうち上位層の構成要素は、総合得点の階層の主に第 1、2 位(370~320 点、17 名)によって占められ、また中・下位層は、主に第 3、4 位 (310~260 点、21 名)によって占められていることがわかる。正答率が高く、かつ解答情況の比較的安定している設問パターンとして、このような傾向が多く見られた。

このうち、さらにまた解答分布について観察してみると、誤答の傾向から、設問における下位層の構成要素は、総合得点の第 4 位 (280~260 点、11 名)である場合が多く見られた (図 4、5)。

これらのことから、解答者が大問それぞれの設問に解答した段階で、解答者の属性 (階層) を明らかにすることにより、その属性をターゲットにした出題を行うことがオンデマンドシステムによって可能となろう。オンデマンド特性のひとつに柔軟性 (フレキシビリティ) が挙げられるが、今後コンテンツ作成においては、解答のパターンを精査したうえで、出題のパターン属性を系統的に整理することにより、このようなオンデマンド特性を活用できるものと考えられる。

(図 5) 5階層解答分布の例 (問9、正解 1)



6. おわりに

インターネットの特性である高い汎用性と優れた再現性によって、中国語学習の機会が大きく広がると予想される。今後は、オンデマンドの特性であるフレキシビリティを活用させつつ、コンテンツ作成レベルにおいて、学生個人の学習状況に対応させることにより、インターネット オンデマンド方式の利用価値は、さらに高まるものと考えられる。

(注)

- (1) 2002 年度 (第 1 年次) の取り組みについては、次の文献を参照されたい。
楊達「オンデマンド授業実践 中国語教育」(『公開シンポジウム 戸山リサーチセンター活動報告 オンデマンド授業の現在と未来 文学部の挑戦』早稲田大学大学院文学研究科・第一文学部・第二文学部、早稲田大学戸山リサーチセンター、2003 年 3 月 31 日) なお、インターネットによって次の URL から閲覧することも可能である。
http://www.littera.waseda.ac.jp/littera/trc/sympo/TRC_sympo_030208.pdf (PDF ファイル)
- (2) 詳細については、次のコンテンツを参照されたい。
「早稲田大学文学部オンデマンド授業一覧」 <http://www.littera.waseda.ac.jp/littera/pj/ondemand/class.html>
- (3) 注 (2) 参考文献、41~42 頁参照。
- (4) 注 (2) 参考文献、46~47 頁参照。
- (5) 注 (2) 参考文献、15 頁参照。